

---

# ROUGH-HEWN TRAVELERS

ししろー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ROUGH - HEWN TRAVELERS

### 【Nコード】

N4403A

### 【作者名】

ししろー

### 【あらすじ】

西洋チックな異世界物語。仲間を集めて戦う二チエの物語。

## 第1話ニーチェの少年時代

「『この世は生まれたとき混沌に在った。秩序が芽生え、破壊され、また混沌となり。繰り返す。その輪廻の中で混沌に立ち向かう者は英雄と呼ばれた。秩序を破壊する者は巨凶と呼ばれた。どちらが正しいということは重要ではない。どちらが生き残るかということが重要なのだ。』コレはリーザー王国初代国王リーザー・ディンバルトの著書の一部ですね。いくつかの暦を越えて、この世をリーザー暦と区切り、今私たちが生きているのがリーザー暦2548年となるわけですね。」

「もう、何度も聞いた。」

あからさまに嫌そうな顔をする少年に家庭教師のウィック・カスケードはため息をついた。この少年こそ、リーザー王国139代国王候補のニーチェ・ディンバルトその人なのだ。茶色いクルクルのくせ毛が宮内の女性に物凄く人気がある。漆黒の目に真っ白い肌は病弱を思わせるが、実際は腕白で、外に出る事も少くない。

「それでは、今日はもう剣の練習にしましょう。表へ出てください。」

「ニーチェはその言葉に、表情をパツと明るくして剣を手を取った。」

「今日はウィックから一本取る！手を抜いたら承知しないからな！」

「？」

ウィックは

「はいはい」

とうなずいて練習場へと向かった。

「たあああ！」

ニーチェの気合いの入った声が響く。ビキイという音と共にウィックが木剣をいなす。

「もつと踏み込んで！こう！」

ウィックの木剣がニーチェの喉一寸で止まる。

「はあ、はあ。」

息を荒くしてその場にドツと座り込む。

「だあああ！惜しかった！もう一回しよう！！」ウィックは息を整えた。

「今日はこの辺で終わりにしましょう。もう二時間半も続けていますから。」

ニーチェは膨れっ面で練習場を後にした。

ウィックは汗を拭き、ニーチェについて考えた。（はあ。国王になんて申し訳すればよいのか。勉強はすこぶるできる。剣も15にしては抜きんでている。しかし、あの言葉遣い。言動。いつまで経っても治らない。どうにか王室として恥ずかしくない振る舞いをしてほしいのだが……。そもそもどこであの言葉遣いを覚えてくるのだろうか？）

ニーチェは剣の練習を終えたあと、汗を拭きながら練習着のままこつそり裏庭に向かった。木を登り塀に足をのせ、外にある馬小屋の屋根に飛び降りた。さらに飛び降りて、音もなく地面に着地した。そうしていつものように村へと走っていった。

「キート？居るかい？」

ニーチェはあまり立派とは言えない小さめの家のドアをノックした。

「ああ、今出るよ。ニーチェ、今日は家庭教師じゃなかったの？」

すぐに出てきたキートという少年は眼鏡を指で押し上げた。

「今日はもう終わったからどっか行かないか？」

ニーチェが言くと、キートは靴を履きながら言った。

「どこいく？今日は市場に用事があるんだ。一緒に行く？」

市場は沢山の人でこった返していた。

「いつ来てもここは賑やかだな！あ、あれハーレンじゃない？」

ニーチェが指を差したほうを見るとそこには背の高いいくつか年上の男が立っていた。髪は金色の短髪で瞳はグリーンに輝いている。誰が見ても色男だ。

「あつ本当だ！ハーレンさん！」

キートが呼ぶとハーレンも気付いたらしくこちらに歩いてきた。

「おう。ニーチェとキートか、久しぶりだな。ニーチェ、こんなところにいるとまた兄貴に叱られるぞ。」

ハーレンはウィックの弟で、若くして城下の警備団の団長で、近隣の村の少年達の憧れの的だ。団長のくせに警備団の中では一番陽気な人間だろう。ウィックとは髪の高さと目付き、性格の違いを除けばとても良く似ている。

「大丈夫さ！ハーレンは内緒にしてくれるだろ。ハーレンこそこんなところで仕事さぼってていいのかよ？」

ハーレンはニーチェの耳に囁いた。

「それでも仕事中でな、この付近で少し妙な噂があつてな……。いいから他の団員に見つかる前に今日は帰りな。」

ニーチェは渋々とキートに別れを告げ市場から抜け出て、家路に着いた。

いつものように城の堀に上ろうとしたとき、馬小屋の横に見知らぬ男が座っていた。黒いフードを身に纏い顔は隠れて見えない。

「……だれだよ？」

ニーチェが恐る恐る聞いてみる。

「ぼくはね、遠い国の皇子なんだ。父上に叱られて、こんなに遠いところまで来ちゃったんだ。」

不自然なしゃべり方で、どこかのなまりがある。

「ふん。俺も皇子だけど、君みたいに一人で遠くには行けないよ。君ってすごいな。」

ニーチェは探り探り話し掛ける。

「そうかな？」

意外そうに言った後、照れ笑いする。

「でも、実は一人じゃないんだ。今にみんなで迎えにくるんだ。君も危ないから逃げたほうがいいよ。あいつら乱暴なんだ。」

ニーチェは一瞬彼が何を言ってるのかわからなかった。

「逃げたほうがいい？そつか！確かに家出した皇子の近くにいたら誘拐犯だと思われちゃうかもな。じゃあ、もう帰るから。」

黒いフードの少年は突然フードを脱ぎ捨てた。

「僕はジェイル。君は？」

黒いフードの下は黒い肌に赤い入れ墨のような模様が刻まれていた。

「・・・俺はニーチェ。」

あまりの驚きに口が強ばった。見たことのない肌の色。よく見ると美しさすら覚える赤い模様・・・。

「君に会えてよかったよ。また会おう。僕の友達になつてよ。」

ニーチェがコクリと頷くと、にっこり笑ってまたフードを被って城下の方へ消えてしまった。

その晩、夜中とも言っているいい時間。ニーチェは宮内が騒がしいことに気が付いた。

「王子！お逃げください！」

突然ウィックが部屋に入ってきた。額から血が流れ服にも血がべつとりと付いていた。

「ウィック！どうしたんだ！？血塗れじゃないか！」ニーチェがそう言い終わるところで、ウィックは遮った。

「テラスから行きます。あなたは剣だけ持ってください。」

ニーチェは剣だけ渡され、次の瞬間にはウィックに担がれ地面に向かって落ちていくところだった。

「わああああああ？お、落ちるううう！？」あ。ぶつ

かる。五階からでも死ぬかなあ。

「王子、情けないですよ。」

ニーチェは一瞬気を失っていたが、気が付くと無事着地し、ウィックに負ぶさっている状態にあった。

「ウィック！降ろせ！何があったんだ？何で飛び降りたのに無事なんだ？」

ウィックはほほ笑み、ゆつくりと口を開いた。

「今からハーレンが迎えに、来ます。ここで待っていて、ください。質問は、ハーレンが、答えて、く、れるで、しょう。」

ウィックの腹部からは血が染みだして、やがて地面に滴るほどの血液が流れだした。

「ウィック・・・？まさか・・・。」

「あ、なた、は本当に、手のか、かる教え、子でした。でも、あなたは、き、きつ、と、いい、王に・・・。」

呼吸が短い。体温が低い。顔色も非道い。

「も、もしかして、飛び降りたときに傷が開いたのか？」

また、唇の両端を持ち上げ、ほほ笑む。

「あ、なたの所為、では、ないです。私の意、志で、す。ほら、ハーレンが・・・来る。私とは、さ、さよなら、です。」

確かに蹄の音が聞こえる。城の中から、悲鳴、建物の崩れる音、炎の音、つまり、王国の終わる音が聞こえる。しかし、ニーチェにはどの音も聞こえなかった。自分の泣き声以外は。

親友が、死んだ。

ハーレンはニーチェを馬に乗せ日が出るまで百数十キロも休まず馬をとばした。東から太陽が出ると、馬を止め、川辺で休憩した。

「ハーレン、ウィックは死んじゃったのかな？」

半分泣きながらニーチェはつぶやいた。

「さあな。」

ハーレンは川を見つめながら、他に考えていることがあるような素振りで答えた。

「キートたちは、大丈夫かな？」

二人ともぼんやりと川を見つめている。

「さあな。」

「親父とかあさんは？」

「さあな。」

「俺どうしたらいいんだろう？」

「自分で考えろ。」

「俺、きつと、いい王に成れるって。ウィックが言ってたんだ。」

「そうか。」

「俺、だから、もう少ししたら、あの国取り返すよ。」

「そうか。」

「ハーレンは手伝ってくれるか？」

「もちろんさ。」

少しの沈黙後。ハーレンはニーチェが眠っていることに気付いた。頬に涙の跡が付いていた。

「きつと、成れるさ。いい王に。」

リーザー暦2548年。リーザー王国滅亡。国王女王含む1590000人以上が死亡。突然王国を襲ったのは、数百の魔物と呼ばれていた旧時代の化け物達。率いていたのは魔界の第六王子と称する黒い肌を持つ少年だった。なお、リーザー王国王子ニーチェ・デインバルト、城下警備団団長ハーレン・カスケードの二名は四年間姿を消すことになる。



## 第2話ラウル出立

「君がこの手紙を読んでいるということは、僕はもう死んでいるんだろ。君は僕の親友であり、最も良き相棒だった、時には喧嘩もしたが、もうそれすらできない。妻ももうじき僕の後を追うだろう。彼女の病気には特效薬も治療法も見つからなかった。……。最後の頼みがある。唯一信用できる君に。僕の息子を育ててほしい。名前は……。」

僕の名前はラ

ウル・ハーゲン。両親が死んでから12年がたった。リーザー暦2550年1月6日。今日で16才だ。僕を育ててくれた人は……。僕は師匠と呼んでるのだけど……。本名はクレイス・マルティネスという。

ラウルは朝起きて、いつものように顔を洗い、二人分の朝食を作った。コンソメスープとサラダと、パンを二切れづつ。パンの焼けるいい匂いにクレイスが目覚めます。

「おはようございます、師匠。」

いつものことだ、変わりはない。クレイスは長く紅い髪を後ろで縛りながら、

「ああ、おはよう。」

と低い声で言った。朝食を食べながら唐突にクレイスが言う。

「そろそろ、お前も一人前だな、家を出ろ。今日。」

「はあ!?!」

ラウルは耳を疑った。あまりに突然過ぎた。

「今日で16才だろう。もう一人で生きていけ。」

「え、あの……。」

ラウルはただただ戸惑う。

「お前を預かってからずいぶん色々教えてきたな。言葉、遊び、釣

り、剣、言いだせば限りがないか・・・。」

ラウルはだんだんと理解してきた。

「俺の眼がくもっていなければお前はもうここでじっとしているベ  
き器ではない。」

ラウルに残された言葉はもう、一つしかなかった。それが涙と共に  
溢れだした。

「いままでありがとうございました・・・。」

ただ、それだけだった。

「いつか旅に出よう。」

そう思い始めたのはいつだったか。師匠は色々な場所に訪れること  
は良いことだと常々言っていた。ついにその日が来たのだ。革で造  
ったバッグに色々な物を詰め込んだ。表に出るとクレイスが厳しい  
表情で立っていた。

「ラウル、いままで俺がお前を育ててきたのは、一つはお前の父、  
サミーユに頼まれたからだ。が、それなりに楽しかった。何でもすぐ  
覚えたし、剣もサミーユに近づくまでになった。・・・お前なら  
どの王室に仕えさせても恥ずかしく思わん。この山奥から出たお前  
は見たこともないような世界が広がっている。好きに生きる。」

「はい！行ってまいります。」別れというのに、ドキドキしている。  
悲しみに未知の世界への好奇心が勝った。ラウルは笑顔になって、  
師に手を振った。

山を下りると農村が広がっていた。12年間師以外の人を見たこと  
はなかった。大人は畑を耕し、子供はさらに幼い子供の面倒を見て  
いる。ラウルにとってすばらしい光景だった。こんなふうになんと人  
とのふれあいがあつて、それを守るため大人は働いている。ラウル  
はたまらなくなつて子供達に近づき話し掛けた。

「ここはなんていう村なの？」

子供達はびっくりした様子だったが、

「セト村。」

とだけ言ってにつこりと笑った。

「ありがとう。じゃあね。」

喋った。短かったが確かに人と会話した。相手は子供だったがにつこりと笑ってくれた。

その日ラウルはうれしくて、いろんな人に話し掛けた。大人も子供もいい人ばかりだった。そして夜は宿を借りて眠った。明日はどうしようか。ここは楽しいけど、もっと遠くまで行ってみたい、と思った。

早朝、ラウルは遠くから聞こえる馬の蹄の音で目を覚ました。  
一匹ではない。

とにかくたくさんさんの馬がこの村に近づいている。

あわててわらのベッドから飛び降りる。

家の主人はまだ気付いていないのか、いびきをかいて眠っている。  
まだ夜も明けないし、ラウルの耳の良さは半端ではないので気付かないのも仕方ない。

外に出ると音は一層激しくなり大気を震わせた。

（戦争か？）ラウルは身震いした。（もし戦争なら、通りすがりの農村を焼かないはずはないだろう・・・。）急いで主人を起こし事の次第を告げると、主人は真っ青になり、妻と息子を叩き起こし、村中に触れ回った。ラウルは村人全員が山中に逃げ込んだことを確認した。ちょうど夜が明け切った頃だった。

東の方から太陽を背にして15・6頭の馬が現れた、乗っているのはどうやら山賊らしい。

「村に入るな！」

ラウルの大声が響く、が、止まるつもりはないらしい。

「ガキが一匹、邪魔してるぜ？」

「踏み潰しちまおう！ヒヤッハア！」

その内一頭が前に出てきた。

「死んじまえよ！ガキィ！」

ぶつかる瞬間ラウルは宙に舞った、足刀が山賊の首に寸分の狂いもなく命中した。男は落馬し、泡を吹いて気を失った。

「んなつ！？」

山賊たちは馬を止め、ラウルを睨む。

「今こいつ軽く3メートルは跳んだぞ。」

「何だこのガキは！？」

ラウルは口を開いた

「この男のようにならなくなければ退け！」

ドスの効いた声が響く。

「死にたいようだな？ガキ。こっちは10人以上いるんだぜ？」

山賊たちは手に武器を握りラウルを睨んだ。

「仕方ない。僕の忠告が聞けないようですね。」

「ガキが忠告？そんなことより遺言でも考えるんだな！」

一斉に山賊が切りかかる。ラウルは一人目の剣を躲し、顔面にカウ  
ンターをいれ、膝で剣を飛ばし見事キャッチした。切っ先を二人目  
の眼前に振り下ろし左からの敵を左腕で投げ飛ばしてぶつけた。ほ  
んの2・3分で全員が地面に這いつくばっていた。

20分ほど経ったか、心配した村人達が山を下りると、村の入り口  
にラウルが立っているのを見つけた。そしてその足元には山賊らし  
い輩が十数人転がっているのを見て、全てを悟った。

「ありがとう！旅の人！」

「一人でこんなにたくさん倒したの！？」

「怪我はありませんか！？」

村人達はたくさんのお声をあげ、ラウルに走りよる。ラウルは腰か  
ら砕け、倒れた。

「大丈夫ですか！」

ラウルは心配そうな村人たちにポツリと言った。

「怖かったあ・・・。」

ラウルはクレイス以外と拳も剣も交わしたことはなかった。誰かを  
守るために戦ったこともなかった。今ラウルは初めて一人前になっ  
た。

昼。「じゃあ僕、そろそろ行きます。いろいろありがとうございま  
した。」

ラウルは皮のバッグを持って、また村の入り口に立っていた。

「いいえ！もつとお礼をしたかったんですが・・・。またいつで  
も立ち寄ってください。」

村人達は皆深々と頭を下げた。最初に喋った子供が大人をかきわけ  
るようにして前に出てきた。

「兄ちゃん。俺、ジンっていうんだ！また村に寄ってね！俺兄ちゃ  
んみたいに強くなるよ！」

ジンはそう言って握手を求めた。

「ありがとう、またね！」

ジンとラウルは固い握手を交わし、お互いにっこりと笑った。

まだ旅は始まったばかりだった。

### 第3話セイロンとそれぞれの道

リーザー王国が在った場所から遠く、ある村のはずれの地下室にセイロンという一人の青年が住んでいた。彼は膨大な蔵書とその知識、そして不思議な術を持っていた。人々からは『魔法使い』と呼ばれ、尊敬されていた。

「セイロン様！魔物が村に入ってきました！お助けください！」  
地下室へ続く扉を村人が叩く。

「ああ、折角眠れそうだったのにい。また結界を張り直さないと。」  
「  
独り言を言いながら、はいはい今出ますよ。と気の抜ける返事を  
してセイロンは表に出た。村人は震えながら魔物が、魔物が、と言  
うばかりだった。

「はいはい。もう心配ないですよ。新しく結界を張りましょう。  
その前に魔物を追い払わなくちゃね。」

セイロンは地面に魔法陣を描くと呪文を唱え始めた。

「火霊カグツチに乞う。聖火を持って邪悪なるものを抜い給え。」  
呪文を唱える声も気の抜ける声だ。「次は結界だね。村まで行かな  
くつちゃ。案内してもらえますか？」

助けを求めに来た村人にそう尋ねる。

「はあ。」

村人はキョトンとしている。

「私は方向音痴でね。毎回案内してもらってるんですよ。」  
村人はセイロンを連れて村に帰っていった。

村に着くと何やら騒がしく誰かが喧嘩をしているようだった。  
「だから！僕じゃないって言ってるだろう！僕は剣は使えるけど炎  
なんか出ないって！」

「じゃあ誰がやったんだよ！？お前が剣を振ったら炎が出たんじゃないか！なんか仕掛けがあるんだろ！？」

見慣れない二人が喧嘩している。しかも原因は明らかにセイロンの魔法だ。

「あゝ。君たち。僕の魔法の所為で喧嘩させてしまつてごめんなさい。」

セイロンがペコリと頭を下げ、そう言う二人はセイロンをジロリと睨んだ。

「魔法？お前がセイロンか？魔界に詳しい？」

茶髪のクルクルの髪の男が言った。後ろ髪が少し焦げている。「ほら、僕じゃなかった。僕は炎なんか出せないんだから。」

ややあつて緑髪の男が茶髪に言う。茶髪はすでにセイロンの胸ぐらを引っ張っている。

「てめえ、この野郎！俺が何日待ったと思つてんだよ！手紙届いただろうが！しかも俺の髪チリチリにしゃがつて！」

セイロンはガクガクと前後に揺られながら手紙について考えた。

「はて……。手紙……。ああ。たしか……。どちら様？」

「ニーチェだよ！ニーチェ・ディンバルト！」

ニーチェは顔を真っ赤にしながらさらにセイロンを揺り動かした。その時、後ろから金髪の背の高い男が、木剣でニーチェの頭を殴った。

「ニーチェ。何してんだよ！セイロン探しに行くぞ、今日こそこの村にくるはずだ！な！……。どうもすみませんねえ。腕白で。」

ニーチェは泡を吹いている。もう緑髪の男の姿は無かった。

「あゝ。私に何か用ですか？」セイロンは金髪の男に尋ねた。

「てめえがセイロンかこの野郎！約束の日付けからもう一週間経つだろうが！」

「いやゝすみませんねえ。忘れっぽくて。ニーチェさん、ハーレン

さん。何の御用でしょう？」

地下室に案内され、話を聞くチャンスなのだが、セイロンの脱力するような声はなんとも言えず調子が狂わされる。

「あ、いや。先程は取り乱してすいませんでした。早速ですが、セイロン殿は魔界についてどの程度ご存じでしょうか？」

ハーレンは礼儀正しく聞いた。

「そうですねえ……。魔界っていうのは簡単には行きませんが、書物によると、ですが。まず魔界って言いまして、ちゃんと人間がいるんですね。それを魔族と言っていますが、肌は漆黒で、言語は違いますがこちらの言葉も喋れます。魔族の言語は難しいので基本的に脳は発達してますねえ。それに魔族は魔法を使います。魔法についてはまた後程。うーん。あとそれから魔物というのは魔族のペットとってください。ご質問は？」

ハーレンとニーチェはスースーと寝息をたてている。良く見ると体は傷だらけで、さっきの戦闘で付いた傷では無い傷も開いているようだった。

「うああはあ。よく寝たあふ。」

ニーチェが目覚めるとハーレンと誰かが話をしているのが聞こえた。

「おや、ニーチェ君が目覚めましたよ。どうです？気分は？」  
見たことの無い中国人みたいな服の男はニヤニヤとへらへらの間の顔でニーチェを覗き込んだ。

「あんたは……。誰？」

「おやおや、記憶がトんでますねえ。私です。セイロンですよ。」  
ハーレンが口を挟む

「傷、うまく治ったな。ニーチェこっちにきてくれ。」

ハーレンに呼ばれ狭いテーブルを三人で囲む。

「ゴホッ。じゃあ話をはじめよう。セイロン殿。ニーチェ。」

「セイロンでいいですよ。照れるなあ。」ニーチェは最近の傷が



すっかり治っているのに素直に驚いている。

「じ、じゃあセイロン。俺たちと一緒に……。」

「お断わりします。」

ニーチェが我に返る。

「おいおい。ハーレン話を最初から頼むよ。」

ハーレンはニーチェに向き直り言う。

「いいか、セイロンには魔界について聞きにここへ来ただろ？だが実はセイロンは高度な魔術をなんなく使いこなす魔法使いだ。」

「いや」。初歩ですよ。「セイロンがまた照れる。

「俺たちにとつてはすげえの！それで、セイロンがいれば旅も楽になるだろ？」

大体は呑み込めた。至極もつともな意見だ。

「でも、断られたわけだ。」

ニーチェが推測できる限りのことを口にするとハーレンには補う言葉はもう無かったみたいだ。

「そういうことだな。」

ふうと溜息を吐く。

「なんで？」

突然ニーチェはセイロンに問う。

「なんでか……？そうですねえ。少し昔の話をしましょう。」

セイロンの眼に悲しみのようなものが一瞬顔を出した。

「私はこう見えても8年前世界を救ったことがあるんです。公には伝わらないですが、魔界での話ですから仕方ありませんよねえ。」

いきなりの伝説じみた話を聞かされ声も出ない二人。セイロンは勝手に話を進める。

「魔界に住むある魔族と戦いました。もちろん仲間もいましたよ。リーダーのカーム、剣の達人クレイスとサミーユ、魔界人ミスティン、そして私。

私はミスティンに、その。惚れてたんです。でも、彼女は死んでしまいました。魔族を裏切り、人間に味方し、さらに、私達はあの、

愛し合っていましたから。そしてここは私達二人が短い間でも住んでいた場所なんです。ここは彼女の墓なんです。だから私はここを離れないと決めたんです。解っていただけましたか？」

4・5秒部屋に沈黙が訪れる。

「そうか。無理は言わないよ。」

先に口を開いたのはニーチェだった。ハーレンも目を閉じ溜息をつく。『仕方ない。』のジェスチャーだろう。

「じゃあ魔界の事は大体聞けたし、いこうかニーチェ。」

ハーレンが出発を促す。

「ああ。色々ありがとうセイロン。また寄るよ。」

席を立つ二人をみて、につこり笑った

「また、逢いましょう。お気を付けて。」

「はぁ……。上手くはいかないもんだな。」

ハーレンが呟く。ニーチェは下を向きながら

「ああ。」

とだけ言う。そこに前日（ハーレンとニーチェは16時間以上眠っていた。）ニーチェと喧嘩していた緑髪の少年が歩いてきた。

「あつ！昨日の……。？ん？傷がない……。？」

緑髪の少年が不思議そうにニーチェを見つめる。

「この先の家のセイロンっていうヤツが治してくれたんだ。……昨日は悪かったな。」

人間切ない話を聞くと少しやさしくなるようだ。

「いや、いいよ。こちらこそ見苦しい様を見せた、」「傷だらけだな。君も傷を癒してもらいにいけば？セイロンに。」

「ああ、そうするよ。ありがとうニーチェ君？僕はラウルっていうんだ、君とはまた逢いそうな気がするよ。またね。」

不思議な言葉を残して、ラウルという名の少年は去った。ニーチェとハーレンの二人旅は今しばらく続くようだ。

#### 第4話ディアナ・リリカとセイロン・ラウルの過去と動向と（前）（前書き）

永らくお休みしていた執筆活動再開です。どうぞよろしく。

#### 第4話ディアナ・リリカとセイロン・ラウルの過去と動向と（前）

元リーザー王国跡地。そこは4年前の魔族の襲来以来魔族と魔物の住む地になっていた……。

「ジェイル様。魔界から使者が来ております。」

薄暗い部屋にその声が響くと、かつてリーザー王国国王が座っていた玉座（ずいぶん形は変わっているが）に座っていた男が返事をする。

「……通してくれ。」

使用人か部下と思われる男が

「はっ」

と切れの良い声が聞こえてしばらく、初老の魔族の男が入ってくる。

「ジェイル様。お久しぶりでございます。グルンでございます。」

「グルン、久しぶりだな。4年振りか。お前が使者ということは相当重要なことだろう？」

「はっ。恐れながら凶報でございます。例の魔女が脱獄しました。」

おそらく新術を使ったのでしょう。あの魔女にとっては獄中で術を開発ことすら可能だったようです。」

「そうか……。まあいい。ただし、次見つけたら確実に殺せ。」

「はっ。承知しました。」

一連の会話を終わるとグルンは一つ咳払いをして言った。

「私はしばらくこちらに居りますので、なにかあればなんなりとご命令を。」

そういつて部屋を後にした。

「くあく！こっちは暑いわねえ。ま、牢獄よりましね。ねえ？リリカ！」

ひどく暑い日、大きな街道に突然二人の人間が現れた。

「ほんと！暑いですね。でもあたしは牢獄には入れられてないですから……。ディアナさんは何年ぶりのシャバなんですか？」

ブロンドの女の子と銀髪の女性は、周囲の目も気にせず話をしていく。

「なんだ……。？今突然……。」

「あの人見て！肌真っ黒。」

「あの子カワイイ！」

周りの人々が注目の視線を浴びせ、さらにはヒソヒソと声をたてるが、まだ二人はマイペースに話を続ける。

「え〜と、7、8年ぐらい？ていうかシャバって……。あんだ幾つ？」

いつのまにか人が集まっていて、ポカンとした顔で見ている。

「そろそろ行きましょ！ディアナさん目立つんだから。とりあえずあたしんちに。」

二人は近くのリリカの家を目指して歩き始めた。

「リリカって一人暮らしなの？」

普通の家より幾分大きな家を前にしてディアナが訊ねる。

「ええ。部屋余ってますから、一部屋あげます。魔界の話してくださいね？」

リリカはドアの鍵を開け、ディアナを導いた。

「いいよ？私の知ってること、色々話してあげる。」

二人は食卓のテーブルで話をはじめた。

「そうねえ。私が捕まってる間のことは何にも言えないんだけど、言葉を遮りリリカが聞く。」

「そもそも何で捕まってたんですか？」

「う〜ん。じゃあそこから話そうか。魔界には人間を極端に嫌う魔族とわりかし友好的な魔族がいるのね。私も後者なんだけど、ちょい昔、ヴィーノっていう魔族の男が居てね。そいつが人間界の侵略

を企ててたわけ。」

「今の第6皇子みたいにですか？」

「今はどうか知らないけど、それまでの魔界の王は人間との関わりはタブーとしてきたの。さっき言った二者が争わないようにね。それで、魔界の王は魔族間の争いを避けるため、数人の人間を魔界に召喚して、ヴィーノを止めようとした。苦肉の策ね。」

「なるほど、人間に解決させることにしたんだ！」

「私の親友は特別にその一行の案内役をしててね。それでヴィーノ一族は滅ぼされてめでたしめでたし。のはずだったんだけど、ヴィーノは死ぬ寸前私の親友に呪いをかけたの。私はそれを解くために禁術に手を出したの。呪いっていうのはかけた相手が死ぬと解けなくなるから、一旦その魂を呼び出して強制的に呪いを解かせるものなの。でもそれもタブー。そもそも呪い自体禁術なんだから。」

「それで親友さんは助かったんですか？」

「ディアナは悲しそうに首を振る。」

「あたしにはできなかった。その前に見つかっちゃって捕まったからね。でも、その時には親友は人間界で最高の頭脳をもつ男と結婚してたから、呪いは解いてもらったかもね。」

「でも、非道いです。たったそれだけで8年以上も牢獄なんて。」

「ディアナはうつむきながら言った。」

「私が捕まっていた理由は他にもあってね。私は魔界でも最高クラスの魔女なんだ。」「？それが何か？」

「リリカはいまいち理解できない。」

「私の魔力は魔族の王にだって通用するのよ。そんなあたしが禁術を使ったなんていい口実。生きては出られないと思っただわ。」

「リリカはじつとディアナを見つめていた。」

「リリカはどうして私を助けてくれたの？」

「リリカはにっこり笑って答える。」

「あなたが必要だからです。・・・あたしの家は昔から占いを糧に生きてきたんです。独自の魔法も伝わっています。」

「ふーん。それで？」「だから、今世界は第6皇子に脅かされてます！この世界を救える人を探していて、一番最初にあなたの名が挙がったんです。今、二人目も占ってみます。」

リリカは紙と筆を取り出し、目を閉じる。手が高速で動きだし絵が描かれる。

「高速自動書記か・・・。」

ディアナの感心と疑心が驚愕に変わる。

「終わりました！えーと？名前は？セイロンさん。こんな感じでディアナさんも見つけたんです！信じてもらえました？」

ディアナの表情は驚きの表情から変わる事無く呟いた

「全面的に信じるよ・・・。確かに世界を救うにふさわしい最高の頭脳の持ち主だ。」

リリカもそれを聞いてその意味を悟った。二人はすぐにセイロンを訪ねることにした。

「ジェイル様・・・。ただ今頼まれていた物が届きました。」

ジェイルは無言で頷きそれを手にする。

「ニーチェ・ディンバルト。ハーレン・カスケード。リリカ・フィナード。か・・・。この3人が余に危機をもたらすと・・・？ふっ・・・。まあ片手間に搜索しろ。あと、魔女ディアナにも気を付けておけ。まあ、4人程度に余が追い詰められることはないだろうがな・・・。引き続き余の驚異になる者を探してくれ。以上だ、退け。」

薄暗い地下室に驚きの声が響く。

「君がラウルくん・・・？サミーユさんの息子！？」

ラウルはあまりの大声に身を仰け反った。

「はい・・・。ラウル・ハーゲンです。けど・・・？」

「そうかあゝ。今いくつだっけ？18？19？」

「今18です。僕の父さん知ってるんですか？」

セイロンは小さくはあ？と言った。

「僕のこと、聞いてないの？クレイスさんに・・・。」

「いえ・・・。全然。」

セイロンは大きく溜息を吐いた。

「そう・・・。クレイスさんそういう事言わないしね。」

セイロンは俯き、また溜息を吐いた。

「あの～父さんの事教えてもらえますか？僕は何も知らないんです。」

暗そうな顔をしてラウルも俯いた。

「いいよ～。代わりに話そう。私が生まれた村はね。セト村っていうんだ。」

「え！？それっ・・・。」

「まあ最後まで聞きなよ～。そこは、別名魔界の入り口っていつてね～。だけど今はクレイスさんが守番してるから。向こうからはこちらに来れない。」

いつのまにか声が真剣になっていて、少し話が途切れた。

「話がいきなり逸れたね。そこで僕は育ったんだ。12才迄ね。そして、魔族がセト村を支配しようとしたのもその年だった。私はその時サミーユさんとクレイスさんに命を救ってもらってね、そこで魔力が目醒めてサミーユさんたちについていく事を決めたんだ。」

「えっと・・・。僕はその頃は・・・？」

「たしか、奥さんと暮らしてたはずだよ。奥さんはすでに病気だったから、魔界の薬なラと思ってサミーユさんはずっと探してた。でも、見つからず魔族の男に殺されてしまったんだ。私は最後まで恩を返すことができなかったよ。だからその代わりに、と言ってはなんだけどサミーユさんの遺書を魔界の入り口で守番していたクレイスさんに渡しに行った。その四年後、やっとの思いで仇を取ったんだ。まあ、細かいことは追々語ろう。今日はこの出会いに乾杯だよ。」

「ラウルはあまりに大量な情報に戸惑いながらもセイロンと杯を交わした。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4403a/>

---

ROUGH-HEWN TRAVELERS

2010年10月17日04時04分発行